

テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

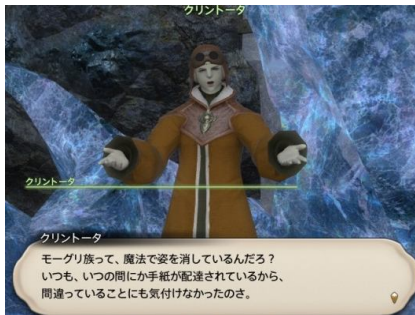
## FF14 備忘ログ(PATCH2.3) レターモーグリ



配達士は突然に ～ 追いたい背中

## 配達士は突然に

**クリントータ** : やあ冒険者さん、いいところに来てくれた。先ほど、レターモーグリが手紙を届けてくれたようなんだが、ボク宛てじゃなかったんだ……。  
父親の名が同じだったから、間違えてしまったんだろう。ほら、ゼーヴォルフって、父親の名を受け継ぐからさ。モーグリ族って、魔法で姿を消しているんだろ？ いつも、いつの間にか手紙が配達されているから、間違っていることにも気付けなかったのさ。  
……この手紙を、冒険者さんに託してもいいかな？ レターモーグリが手紙を回収しに来るのを待てたら、いつになるかわからないからね。  
本当の受取人は、**我が兄の「リスフロー」**。リムサ・ロミンサのブルワークホール付近で、警備にあたっているはず。急ぎの手紙ではなさそうだから、近くに立ち寄ったときに届けてくれればいい。  
……ついでに、食べ過ぎに注意するよう伝えてくれよ。



**リスフロー** : どうした、道にでも迷ったか？ 俺はこの警備を担当している者だが、何か用か？  
……俺宛ての手紙が、妹のところに行ってたのか。わざわざ届けてくれて、ありがとよ。  
妹の伝言どおり、食べ過ぎにも注意するよ！

**????** : クボ、クボ、クボー！ リスフローさん、ごめんなさいクボー！！  
**レターモーグリ** : みんなの大切な手紙を預かる「配達士」モグとすることが、リスフローさん宛てのレターを、なくしちゃったみたいなのクボ……。  
これは、配達士としてあるまじきことクボ！ お詫びにモグの、とっておきダンスを……。



**リスフロー** : おお、こいつはモーグリ族じゃないか！ 自分から姿を見せてくれるなんて、珍しいこともあるもんだ！  
はっはっはっ、そう落ち込むなって！ 一生見ることがないと思ってたモーグリ族と話ができて、俺としちゃ、むしろ嬉しいぐらいさ！  
レターモーグリっていやあ…… お前ひとりで、エオルゼアの各地に行っては、たくさんの手紙を届けてるらしいじゃないか。  
最近、冒険者の数も増えてきたから、手紙の量も多くなったんだろう？ たまに間違えるのも無理ないさ！  
それに、俺宛ての手紙なら、ちゃんと受け取ったぞ。この冒険者が、届けてくれたんだ。

**レターモーグリ** : よかったクボ～！！ 冒険者さんは「配達士」の才能があるクボね！  
はっ……！！ もしよかったら、冒険者さんも「配達士」になって、モグのお仕事を手伝ってみたいなクボ？  
**はい**

**いいえ**  
それは認められないクボ！ エオルゼア中の人とお話できるステキなお仕事クボ。  
とにかく、今からモグが「配達士」の先輩クボ！

**先輩レターモーグリ** : 今後、「配達士」の仕事任せるときは、モグは先輩として接するから覚悟するクボ！ 何事も、ケジメが大切クボ！  
後輩君に「配達士」の仕事の依頼や指導があるときは、この場所にモグがいるクボ！  
見かけたら、必ず声をかけるクボ！  
普通のヒトは、モーグリ族の姿が見えないクボ！ その点、後輩君みたいに魔法の才能があるヒトは、いつでもモグを見つけれられるから楽ちんクボ！  
さあ、これで配達士の最初の指導は終わりクボ！ さっそく「配達士」の初仕事に取り組むクボ～！

## 反抗期の終焉

**先輩レターモーグリ**：後輩君の初仕事に、もってこいの配達があるクボ！ このブルワークホールの上の階にある、「溺れた海豚亭」の店主「**バデロン**」さん宛ての手紙クボ！  
お店にひしめく、むさくるしい冒険者や船乗りを掻き分け、ちゃっちゃか手紙を届けてみせるクボ！  
ここで、『**配達士の心得そのいち**』クボ！ 「配達士」の仕事は、手紙を届けるだけで終わらないクボ。  
手紙に込められた想いを届けて、はじめて終わるものクボ。  
特に後輩君は、冒険者だから、ついでの用事を頼まれることもあるはずクボ。  
そんな時は、最後までつきあうのが立派な配達士クボ！  
今回は、後輩君の記念すべき初仕事クボ！ 特別にモグがここに残ってるから、仕事をやり遂げたら、報告しに来るクボ！



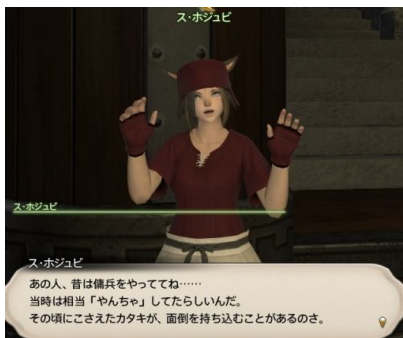
**バデロン**：おう、顔出してくれるなんて、嬉しいじゃないか。おまえさんの活躍は、この店にもちゃんと届いてるぜ！  
……ほう、俺への手紙を持ってきたって？  
どれどれ、どこのだいつからの手紙だ？  
こりゃまいった、厄介な客が来なさるな……。……なあ、おまえさん、すまんが中央ラノシアまで、ウチの「客」を迎えにいったくれないか？

はい

いいえ

そこをなんとか、頼むよ。この手紙を届けたのも、なにかの縁ってことで、な？  
やっこさんとしたら、面倒きわまりねえ野郎でな。腕利きじゃなけりや、どうにも手に負えんのだ。  
ゼファール陸門からでた中央ラノシアのどこかに、「ガラの悪いルガディン族」がいたら、そいつが「客」だ。  
手間をかせさせてすまないが、頼んだぞ。  
ああ、それから……。出迎えに行く前に、そこにいる「ス・ホジュビ」に、もてなしの仕込みを手伝うように声をかけてくれ。  
「ス・ホジュビ」に、仕込みを手伝うよう伝えたら、中央ラノシアに「ガラの悪いルガディン族」を迎えにいってくれ。

**ス・ホジュビ**：……厄介な客が来るから、仕込みを手伝って？ おや、またバデロンの昔のカタキが、あだ討ちにくるのかもしれないね……。  
あの、昔は傭兵をやってたね……。当時は相当「やんちゃ」してたらしいんだ。  
その頃にこさえたカタキが、面倒を持ち込むことがあるのさ。  
中央ラノシアにいる「ガラの悪いルガディン族」ってのが、もしもヤバそうなヤツだったら……。  
水でもぶっかけて、ぶちのめしてくれよ。  
さあ、この冷水を持っていきな。頼んだよ！



**怯えたワイン商人**：どうか、ご勘弁を。こ、このワインは大事な売り物だ。これを奪われちゃ、破産しちゃうんだ～！

**ガラの悪いルガディン族**：ういー、よう、兄ちゃん……ヒック。いいもん運んでんじゃねーか……ヒック。俺にも、一杯めぐんでくれよ。

**怯えたワイン商人**：そこのお方、お助けを～！！ 売り物のワインを奪われちゃ破産しちゃう～！  
何か投げつけて、打ちのめしてください～！！

ガラの悪いルガディン族 : ぶはっ、冷てえ！ こりやかなわん！！

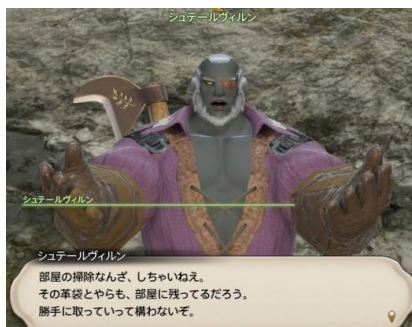
怯えたワイン商人 : 危ないところを、ありがとうございます！ 放っておいたら、また人を襲うかもしれません！  
ヤツを追いかけて、打ちのめしてください〜！



ガラの悪いルガディン族 : あんたは、さっきの！？ も、もう水は勘弁してくれ！！ すまん、ちょっと悪酔いしちゃってたんだ！  
……俺が、バデロンのカタキだろうって？ おいおい、なんでそんな話になってるんだ？  
俺の名は、**ティルスヴェーン**。バデロンとは、正真正銘のダチだ。

ティルスヴェーン : ……なるほど、そういうわけか。まあ、見てのとおり俺はちょっとばかり酒癖が悪くてよ。  
バデロンには厄介者扱いされても、文句は言えねえな。  
バデロンとは、傭兵時代につるんでた仲だ。いわば、戦友ってヤツだな。  
まあ、あんたのおかりで酔いもさめたぜ。よければヤツの店へ案内してくれよ。  
……って、あれ、しまった！ バデロンへの土産を入れた革袋を宿に忘れちゃったぞ。急いで取りに戻らないと……。  
イデテ……しまったな。あんたに水をかけられて、ここまで駆けてきたときに、足を痛めちゃったようだ……。  
悪いがあんた、サマーフォード庄へひとっ走りして、「**シュテールヴィルン**」に、革袋のことを聞いてきてくれないか。  
昨晚、旦那から宿を借りたから、話せばわかるはずだ。

シュテールヴィルン : こりやまた、できそうな冒険者じゃないか。海賊崩れの農夫ばかりの農地になんの用だ？  
……ほう、あの酔いどれが忘れていった、「土産の入った革袋」を探しにきたのか？ なんとまあ、律儀なこった。  
部屋の掃除なんぞ、しちゃいねえ。その革袋とやらも、部屋に残ってるだろう。勝手に取って行って構わないぞ。  
見つかったか。あの酔いどれに、飲みすぎんかと伝えてくれ。



ティルスヴェーン : サマーフォード庄に忘れちゃった、バデロンへの土産を取りに行かないと……。  
おお、ありがとう！ ……バデロンへの土産ってのは、古びたコインさ。まあ、細かい話はバデロンの店でしようぜ？  
酒が俺を呼んでるもんでな！ 店の場所は、そこの衛兵に聞いたよ。土産の礼におごるから、「バデロン」に声をかけな。

ティルスヴェーン : ひやへ、ここの酒は最高だあ。あんたも、いっしょに飲もうぜ！ 一杯おごるから「バデロン」に声をかけな！

バデロン : おう、厄介ごとをおしつけちゃって悪かったな。ヤツのおごりがあるんだろ？  
待ってな、ウチで一番イイのを出してやるからよ。

ティルスヴェーン : まったく、ヒドイ話だぜ。はるばる訪ねてきた旧友に、凄腕の冒険者を差し向けて、追い払いにかかるとはな！

バデロン : うるせえ。お前が来ると、店の酒が飲みつくされて、こっちは商売上がったりなんだよ。

ス・ホジュビ : この酒は、あたしのおごりだ。カタキが来ると勘違いして、追い返そうとしたのはあたしさ。  
バデロンは何も悪くないんだ、すまなかったねえ。

ティルスヴェーン : はっは一、気にすんな。ヤツとのケンカは、挨拶みたいなもんよ。それにあんたほどのイイ女なら、なにされても歓迎だぜ！

ス・ホジュビ : アハハ、ありがとよ。でも、なぜバデロンへの土産が、古びたコインなんだい？  
言っちゃ悪いが、顔面以上の価値はなさそうだけど？



**ティルスヴェーン** : こいつは、俺たちが駆け出しの傭兵だったころの話さ……。新米の俺たちはヘマばかりで、取り分がないことが多くてな。そんな時、ある傭兵の先輩が約束してくれたんだ。先輩より長く生き残る運があったら、コインをやるってな。100ギル金貨には、運命の女神ニメーヤが刻まれてるだろう？つまりは「幸運の証」ってことだ。そんな約束をしてくれた先輩が、最近、病で亡くなったんだ……。見舞いに通っていた俺に、彼は2枚のコインを渡してくれてよ。約束どおり、パデロンにも届けろってな……。おっとガラにもなく、しんみりしちゃったな。……あの頃は、まさかパデロンが凄腕の傭兵になるたあ、誰も予想してなかったもんだぜ。

**ス・ホジュピ** : それほどの凄腕が、なんだってまた、かたっくらしい冒険者ギルドの窓口に収まってんのさ……。？

**ティルスヴェーン** : おや、知らないのかい？ そうだな……まあ、これは酔っ払いの戯言だが……。20年ばかり前のことさ……。戦争が減り、行き場を失いつつあった傭兵をまとめ、冒険者ギルドを設立した、伝説の傭兵隊長がいた……。だが、その息子は、冒険者ギルドの仕事に携わるのを嫌がって、傭兵として親父を超えると誓ったのさ。そいつを諦めたのか、あるいは満足したのか……。ともかく、長い長い反抗期が終わった結果、息子はギルドの窓口に収まったらしいぞ。



**ス・ホジュピ** : えーっ！？ じゃあ、パデロンの親父さんって……。！！

**パデロン** : こらあ、ス・ホジュピ！ いつまで油売ってんだ！？ さぼってないで、仕事しろ！！

**ス・ホジュピ** : はいはい、わかったよ。

**ティルスヴェーン** : さてと、俺もそろそろ行くとするか。俺があの子としゃべっていると、誰かさんが妬いちゃうようだしな。……また、気が向いたら来るぜ！

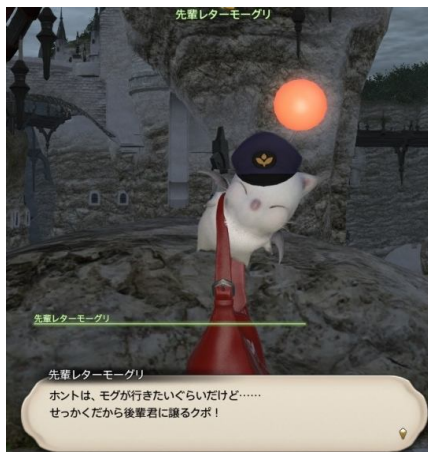
**パデロン** : やれやれ、ようやく嵐が去ってくれるらしい。だがよ……たまになら、ここに来てもいいぞ！ おごってやるよ、一杯までならな！ 厄介事を引き受けてくれて、ありがとよ。……手紙ってのは、たまにもらうといいもんだな。

**ス・ホジュピ** : 厄介事に巻きこんじまって悪かったね。おかげで、パデロンの旧友や新しい一面も知れて、あんたには、ほんとと感謝してるよ。

**先輩レターモーグリ** : お帰りクボ！！ 初めての「配達士」のお仕事……。どうだったクボ？ パデロンさんの昔のお話まで聞いたクボ？ すごいクボ！ さすがはモグの見込んだ後輩君クボ！！『配達士の心得そのいち』、見事に修得クボ！ 手紙に込められた思いまで、後輩君がちゃ〜んと届けられたってことクボ！ ……これなら、もっと遠いところの配達や、気難しい人への配達も、安心して任せられるクボ〜！ 次の配達からは、モグへの報告もいらないクボ！ この調子で、どんどん配達よろしくクボ！！

## チャボアザミが繋ぐ願い

先輩レターモーグリ：後輩君に、楽しいお仕事があるクボ！ グリダニアにあるカーラインカフェの店主、「ミューヌ」さんへの手紙クボ！  
カフェのステンドグラスから射す光を浴びながら、居合わせた冒険者さんとおしゃべりするのが、モグの密かな楽しみクボ！  
ホントは、モグが行きたいくらいだけど…… せっかくだから後輩君に譲るクボ！



ミューヌ：やあ、いらっしやい。君の噂を聞かない日はないよ、がんばってるようだね。……おや、僕に手紙だって？  
なにに……ほう、これは……。フフ、良い知らせを届けてくれてありがとう。  
どうやら、この先、とても忙しくなりそうだよ。……そうだ。余裕がある今のうちに、僕の話につきあってくれないかな？  
僕が、まだ幼かった頃の話さ……。あるラファエル族の父娘が、グリダニアにやって来た。  
詳しい事情はわからないが、故郷を捨て、各地を放浪した末にたどり着いたらしい。  
……そう、その親子は移民だったんだ。  
もちろん、黒衣森の精霊の審判を受けた結果さ。なのに、今よりも異民族に厳しかった当時のグリダニアの人々は、  
この父娘に辛くあたってね。  
見かねた僕の祖父が、この小屋…… カフェに改装される前の水車小屋に親子をかくまったんだ。  
ウチは、高祖父の代から続く水車番の一族だね。生活の基盤である水車を手入れする水車番は、一目置かれる存在だったのさ。  
祖父の行為によって、グリダニアの人々も、しぶしぶ親子を受け入れたんだ。  
そうしたこともあって、移民の親子は恩を感じたようだね。都市に新しい水車を建てることになったとき、  
自ら設計と建築に協力を申し出てくれた。  
親子の父親は元船大工で、木工に深い知識があったらしくてね。彼の協力で作られた大水車を、ぜひ君にも見せたいんだけど……  
その前に、ひとつ準備をお願いしてもいいかな？  
市街を回って、「チャボアザミ」を4個ほど摘んできてもらいたいんだ。そうしたら、いい場所へ案内してあげるからさ。

ミューヌ：「チャボアザミ」は、集まったかい？  
ありがとう、これは僕にとって特別な花だね……。それじゃ、僕はこの花を使って準備をするから、  
君は、先に中央森林の「翡翠湖畔」で待っていてくれるかい？

ミューヌ：やあ、お待たせ。  
ここから見る景色も格別だろ？ ご覧、あれがグリダニア最大の水車…… 「フィガガ大水車」さ。





ミューヌ： ……とても大きいだろう？ 僕の祖父とララフェル族の父親が作り上げた水車だけど……  
実は、ふたりとも完成した姿を見ていないんだ。  
ちょうど設計図面が完成したところに、その父親は、流行病で亡くなってしまったのさ。  
だけど話はここで終わらない。移民の娘……**フィガガ**が、父親の遺志を継ぐと申し出たんだ。  
まったくの素人だった彼女は、木工師ギルドで技を学び、10年越しで、父親が残した設計図面を元に、  
大水車を完成させてくれたんだよ。  
グリダニアにやって来た時には、チャボアザミの花飾りを好んで身に着けるような、おしとやかな女の子だったフィガガ……。  
そんな彼女が、父親の死を境に、自分を「僕」と呼ぶ男勝りの女性になった。父親の遺志を継ぐ、覚悟の表れだったんだろうね。  
決してあきらめず、努力し続けたフィガガは、僕にとって永遠の憧れであり、目標なんだ。  
……自分を「僕」と呼ぶマネをするほどにね。  
そんな彼女も、父親と同じ病で亡くなってしまった……。だから、親子の思いが詰まった大水車がよく見えるよう、  
ここで、ふたりを葬送したのさ。  
君のおかげで、いい墓参りになったよ。……さあ、帰ろうか。フィガガが好きだったチャボアザミの名をつけた、僕のカフェへ。

ミューヌ： わざわざ付き合ってくれてありがとう。君のような異邦の民にこそ、この話を知っておいてほしかったんだ……。  
僕が祖父の水車小屋をカフェに改装したのも、異邦からの訪問者を歓迎するためなんだ。  
フィガガ父娘のように、辛い想いをする人が出ないようにね。  
だからこそ、冒険者ギルドの顔役を引き受けもした。  
そして、君と出会い、この良き手紙を手にすることができた……。  
手紙は、冒険者ギルドの本部からだね。僕の申請が通って、さらに多くの冒険者を、受け入れることができるようになったんだ。  
どうしても君と一緒に、フィガガにこの報告をしたくてね。……だって、君の活躍のおかげで、  
冒険者ギルドは発展しているんだから。  
……そう、君はまるで光だね。これからも、グリダニアを…… いや、エオルゼアを照らし、導く光でいてくれよ。



## 夢あふれる髪飾り

先輩レターモグリ： 後輩君への、次なるお仕事があるクボ！ ウルダハにあるクイックサンドの女将、「**モモディ**」さんへの手紙クボ！  
モモディさんは、いつもモグの話聞いてくれる、とっても優しいおば……お姉さんクボ！  
この手紙、差出人の名前がないのが、ちょっぴり怪しいけど…… 配達士としては、届けないわけにはいかないクボ！

モモディ： あら、◇◇◇じゃない。あなたの活躍は、たくさん耳にしているわよ！ 今日、顔を世にきてくれたの？  
まあ、私に手紙？ ありがとう。あら、差出人の名前がないわね……。……なにに？  
『愛するモモディさんへ。 あなたの笑顔は、エシュテムの宝石より輝いて美しい……  
どうか、恋人という、僕だけの宝石になってください。』  
……。この捻りのない恋文……さては……。

？？？： モモディさん……！ 僕からの手紙は、もう読んでくれましたか？

モモディ： やっぱ、この恋文はあなたが書いたのね。差出人の名前がなくても、一読でわかったわ……。  
いつもは直接、愛を囁いてくれるのに、今日は恋文だなんて、どういう風の吹き回しかしら？



**裕福そうな男** : 押してダメなら引いてみる、ですよ。現にあなたは、文面からほとぼしる僕の静かな情熱に、自然と胸が高鳴ったはずだ！ただ、返信を待つだけなんて、もどかしくて無理でした！一刻も早く、あなたから色よい返事をいただきたくて、こうして、はせ参じたというわけです！

**モモジ** : ……結局、引いてないじゃない。  
彼は、**トーマス**くん。香辛料の取引で財を成した豪商さんよ。  
トーマスくん、まずは彼女にお礼を言ったら？ この手紙は、彼女が届けてくれたのよ。

**トーマス** : おお！ そうでしたか……！ こんなに良いタイミングで届けてくれるとは、君はとても良い仕事をしてくれました！！  
さあさあ、モモジさん！ 僕だけの宝石になってくれると、その美しい唇から、愛の言葉を囁いてください！

**モモジ** : ……何度も言っているけれど、あなただけの、モモジになるつもりはないわ。

**トーマス** : ……やはり今でも、その髪飾りを作った男のことが好きなのですか？

**モモジ** : どうして、今さらその話を……。もう、随分と昔の話じゃない。

**トーマス** : 昔の話……。本当にそうでしょうか？  
あなたがつけている髪飾りは、昔の想い人の手による品だと聞いたことがあります。  
そして、震災以降、それを身に着けるようになったと……。  
未練がないとは、とても思えない！！ 僕への対応がつかないのも、彼を想っているからでしょう？  
……その人は、僕よりも財ある人なのですか！？



**モモジ** : それとこれとは、別の話よ。確かに、この髪飾りは昔好きだった人からの貰い物だけれど、彼に未練があるから着けているってわけじゃないわ。

**トーマス** : ……なんとも、歯切れの悪い言葉です。そうだ、あくまでモモジさんが、はぐらかすおつもりなら、僕が贈り主の男よりも優れていると、証明してみせますよ！  
冒険者さん、手伝ってください！ 髪飾りの贈り主を探し出し、第三者の公平な目で、僕とその男のどちらが優れているか、判定してもらいます！  
ひとまず、その男の情報収集ですね……。髪飾りを作ったということは、彼はおそらく彫金師！  
まずは、彫金師ギルドに探りを入れてみましょう！

**モモジ** : 変なことに巻き込んでごめんなさい。よかったら、トーマスくん付き合っただけで、彼ったら思い込んだら一直線で、あぶなっかしいから。

**トーマス** : 冒険者さん、この方に聞いてみましょう。モモジさんと僕のためにも、協力願いますよ！

メメデス : モモディに髪飾りを贈ったやつ? ああ、モモロトのことだな。  
数年前は、人気の彫金師だったんだがな……。王宮へ献上する品の納品日に、逃げ出しちゃったんだよ。  
腕の良さを買われての大役だったんだが、やっこさん、小心者なところがあったなあ……。  
周囲からの過度な期待に堪えきれなくなったって噂だぜ?  
ウルダハを飛び出してからは、確か……。西ザナランの漁村、「クレセントコーヴ」で暮らしてると聞いたぞ。



トーマス : 恋敵が、まだザナランにいたとは好都合です! クレセントコーヴへ行きましょう!!

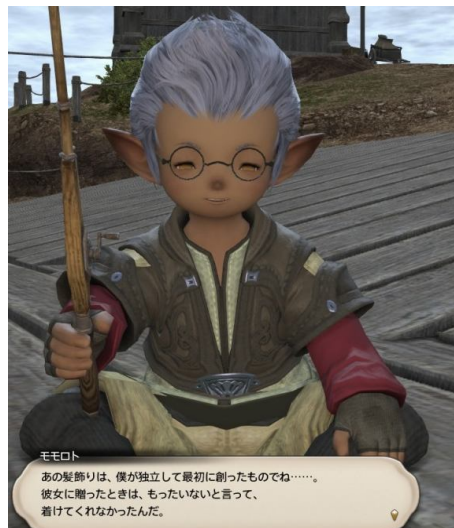
モモロト : おや……。こんな寂れた場所に、強そうな冒険者さんが何用で?

トーマス : この人がモモロトさんですね。モモディさんの期待と愛を受けながら、それを投げ捨て逃げだした方ですか……。  
ふん、ずいぶんとみずぼらしい男ですね。どうしてモモディさんは、こんなヤツからの髪飾りなんて大事にしているんだ。

モモロト : 彼女は、あの髪飾りをつけてくれているのか……。……モモディには悪いことをしたと思っている。  
逃げ出したことについては、言い訳はしない。  
夢だったはずの人気彫金師になったはいいが、大きすぎる期待に、僕は押しつぶされてしまった……。  
そんな僕が彼女に相応しいはずがない。  
だからこそ逃げたし、それで良かったんだ……。人気彫金師だなんて、僕には分不相応だったのさ。  
ここでの静かな暮らしの方がお似合いなんだよ。

トーマス : な、なんて張り合いのない!! 僕ならば、どんな手を使ってでも、モモディさんの期待に応えるというのに!!  
……僕と彼、どちらが優れているかなんて、一目瞭然です。冒険者さんに、判定していただく必要ありませんでした。  
早くモモディさんのところへ帰りましょう!

モモロト : ……そうだったのか。彼は、モモディのことが好きなんだ……。だから、僕のことを調べにきたのだね。  
あの髪飾りは、僕が独立して最初に創ったものでね……。彼女に贈ったときは、もったいないと言って、  
着けてくれなかったんだ。  
今になって、着けてくれるようになった理由はわからない。だけど、モモディのことだから、きっと未練なんかじゃなく……。  
もっと彼女らしい理由があるんじゃないかな。  
……なんて、僕が口に出せた義理じゃないか。それよりも、早くモモディのところへ行行ってやってくれ。  
今頃、まっすぐな彼の求愛に困っているだろうからね。



トーマス : モモディさん! あんな男のどこに惚れたんですか……。僕の方が、よっぽど素晴らしいじゃないですか!!!

モモディ : おかえりなさい、◇◇◇。何だか変なことに巻き込んだじゃって、ごめんなさいね。

トーマス : あんな男が、あなたと釣り合うとは思えない! 僕と天秤にかけること自体が間違いでした。  
冒険者さん、あなたもそう思ったでしょう!?  
あんなヤツの贈り物をつけている理由が、僕には、まったく理解できません!!

モモディ : 言ったでしょう？ 未練があって、この髪飾りを着けたわけではないの。……この髪飾りはね、夢に向かう人の象徴なのよ。モモトは、以前私が勤めていたお店の常連でね。彼の話を聞いたり、相談に乗ってあげたりしていたのよ。あの時の彼は、夢に向かってまっすぐだったわ……。私は、そんな彼のことが好きだったの。だから彼の気持ちも考えず、背中を押し続けてしまった。……私の期待が、彼の夢を台無しにするとは知らずにね。自分の過ちに気付いたのは、彼が消えた後よ……。残された髪飾りには、彼の夢がたくさん詰まっていたから、私なんか着けちゃいけないって思っていたの。

トーマス : ではなぜ、霊災後になってからつけたのですか！？

モモディ : 第七霊災があって、たくさんのものが失われた。……けれど、人々は新しい夢を見つけ、復興へと歩んでいった。それを見ていて、気付いたの。やっぱり私、夢を追いかけている人が好きなんだって。彼らを見守っていくことが、私にとっての夢なのよ。この夢を、今度は私自身が追いかけていたい…… そう思ったから、この髪飾りを着けて、窓口に立つことにしたの。ちょっとだけ、戒めの意味もあるんだけどね。他人の人生に、余計な口を出さないこと…… おせっかいな私には、必要な戒めよ。



トーマス : すっ、素晴らしい……！ やはり、あなたは僕の見込んだとおりの女性でした！！  
ああ、愛しています、モモディさん！ 今度は、僕のとなりで、僕の夢を見守ってください！

モモディ : だーかーらっ、私はみんなのモモディなの！ 今は、誰かのものになるつもりはないわ！

トーマス : そ、そんなあ～！

モモディ : フフフ……。あなたが、自分の力で、とびきり素敵な夢を見つけたら…… その時は、考えちゃうかもしれないけれどね？

トーマス : そ、それは本当ですか……！ だったら、今すぐ帰って、あなた好みの壮大な計画に、投資するといたしましょう！  
冒険者さん、今回は礼を言います！ 次は、僕とモモディさんの結婚式でお会いしましょう！

モモディ : なんだか、まだ勘違いしている気がするけれど……。フフフ、あなたたちのおかげで、なんだかスッキリしたわ。  
ありがとう、◇◇◇。

モモディ : ◇◇◇、いらっしやい。あなたのおかげで、新たな気持ちでここに立ってるわ。  
この髪飾りも、いっそう似合ってきたでしょ？ ……でも、人生相談は相変わらずお断りよ。

## モールのひみつ

先輩レターモーグリ : やあやあ、後輩君！ 配達士として、めきめき成長してるクボね！ 絶対調な後輩君に、次のお仕事クボ！  
博物学者「マルセット」さん宛ての小包の配達クボ！ クボボ……なんだか、この小包はちょっぴり臭うクボ。  
早く届けたほうがよさそうクボ！  
マルセットさんは、中央森林の「ダNSTAN監視哨」近くで、働いているって噂クボ！

マルセット : あら、第六助手じゃない……第九助手？ 第二十七助手だったかしら？ まあいいわ。  
……私宛ての小包ですって？ フフ、フフフ、ついに来たのね。  
さて、開封っと……な、な、な、なんじゃこりゃ～！ オブリオー！ オブリオー！ この役立たず！ グズ！ マヌケ！

オブリオー : せ、先生……どさくさにまぎれて酷すぎます。



**マルセット**：待ちに待った研究素材が届いたと思ったら！……いったい何なの、この肉は！？

**オブリオー**：何って、先生が僕に手配を任せた「モールの肉」じゃないですか？ 忘れっぽくてやだな～。

**マルセット**：私が頼んだのは「生のモール」！ 生きているモグラ！ 生肉から、どうやって私の仮説を証明しろっていうの！  
 ……こうなったら、仕方がないわ。アンタの出番よ、第五十六助手！  
 私が執筆中の「新工オルゼア博物誌」……その新章のテーマは、ズバリ「モール」よ！  
 ずんぐりむっくりしたモグラのことよ、見たことあるでしょ？  
 ただし、私の新説を証明するためには、どうしても「モールの幼獣」が必要なの。  
 「モール」は、中央ザナランに生息してるわ。  
 畑荒らしの害獣として有名だから、「**王立ナナモ菜園**」で働く地元の園芸師に聞けば、生け捕りにする方法が解るはずよ。  
 さあ、第三助手！ 中央ザナランに行って、さくっと1匹、「モールの幼獣」を捕まえてらっしゃい！

**オブリオー**：……明らかに先生の説明不足じゃないですか……。それなのに、グズのマヌケの役立たずだなんて、マルセット先生、あんまりです。



**ガガリ**：え、「モールの幼獣」を生け捕りにしたいって？ 物好きな冒険者もいたものねえ……。でも、畑荒らしを駆除してくれるっていうなら歓迎よ。  
 注意深く畑を探せば、穴が開いた「モグラ塚」が見つかるはず。その側に、この「雑草の束」を置いてみて。  
 それから「軽い火打ち石」を使って、「雑草の束」に着火してちょうだい。煙にいぶされて、モールが飛び出してくるはずよ。  
 ただし、親モールは幼獣を守ろうと、怒り狂うはずだから……くれぐれも気をつけてね。

**マルセット**：お待ちかねの「モールの幼獣」ね？ さすが、私の第一助手、どこかの役立たずとは違いだわ！  
 フフフフ……クククク……！ さあ、実験の開始よ！  
 うりゃ、どりゃ、どっせーい！

**オブリオー**：そ、そんな……マルセット先生！ いくらなんでも！

**マルセット**：これならどう！？ お次は、これをこうして……アノノノノハッ！

**オブリオー**：ひ、ひどい……むごい…… あんまりです～！



- マルセッ ト** : ハア、ハア、ハア…… やっぱ私の仮説は正しかったわ！  
 モールっていうのはね、トンネル状の巣穴を掘って暮らす生物なの。それにも関わらず、やたらと大きな目を持っているでしょ。  
 私の師匠「**アデレーネ**」は、その目は薄暗い巣穴の中で、獲物を捕らえるために、発達したものだという説を主張してきた。  
 でも、私の考えは違う。この大きな鼻が、微弱な震動も敏感に感じ取り、「揺れ」を「視て」周囲を認識しているのよ。  
 事実、目が十分に開いていない「モールの幼獣」が、見事に震動の方向を見分け、的確に逃げ回っていたわ。  
 これで……これで、師匠の鼻を明かしてやれる！ 私の斬新な新説を前に、むせび泣くがいいわ！  
 クククク……アノノノノノ！  
 さて、優秀な助手には、ご褒美をあげないとね……。届けてもらった肉は食べちゃったから、この幼獣をあげるわ。  
 まだ小さいけど、育てれば美味しく食べられるでしょ？
- マルセッ ト** : ……あら、ごめん遊ばせ。「新工オルゼア博物誌」を執筆するために、少々立て込んでいるの、静かにしてくれない？
- オブリオ** : 僕なんかが研究者を志したのが、間違いだったんだ。ごめんよ、お母さん。もう、田舎に帰りたい。  
 ごめんよ、お父さん。

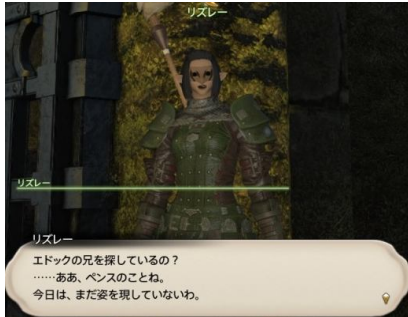
## 記憶を失う男

- 先輩レターモーグリ** : 後輩君、配達士の仕事には慣れてきたクボ？ 今回のお仕事は、ウルダハの呪術士ギルドからの小包の配達クボ。  
 宛先は、グリダニアの碩老樹瞑想窟にいる、幻術士様「**ブレイヤ**」さんクボ！  
 クボクボ……幻術士様と呪術士が連絡を取りあうなんて、なにか不思議な問題の相談でもしてるのかもクボ……。  
 きっと待ってるから、急いで配達してあげてクボ！
- ブレイヤ** : ふう……タムタラの墓所に、ハウケタ御用邸……。最近、黒衣森で妖異による事件が増えています。  
 しかし、どうにも情報が少ない……困ったものです。  
 ……これは例の小包？ よかった、面談に間に合ったようです。この小包の中身は、ウルダハの呪術士ギルドに依頼していた、  
 妖異に関する一級品の資料なのです。  
 実は、私が担当している相談者さんが、妖異に魅入られている恐れがありまして…… この本を取り寄せてみたのです。  
 その相談者さんは、記憶の欠落が頻繁に発生し、ふと気付くと心当たりのない場所にいることがあるそうです。  
 しかも、身体中に身に覚えのない傷が無数にできていたとか。  
 ……今日は、件の相談者さんとの面談の日。そろそろいらしても良い頃合いなのですが…… どうにも遅いですね。  
 もしや妖異に操られ、危険な目にあっているかもしれません。クォーリーミルにいる相談者の妹「**エドック**」に、  
 お兄さんの安否を確認してくださいませんか？



**エドック**：……えっ、ブレイヤ様が兄を探しているんですか？ やだ、てっきり碩老樹瞑想窟に行っているものだとばかり……。ブレイヤ様のところに行っていないなら、出先から直接、仕事場に向かったのかもしれませんが……。  
「ムントウイ醸造庫」で兄の居場所を聞いてみてください。  
……すでにお聞き及びでしょうが、最近、なんだか兄……ベンスの様子がおかしいのです。  
どこかで倒れていなければいいのですが……。

**リズレー**：エドックの兄を探しているの？ ……ああ、ベンスのことね。今日は、まだ姿を現していないわ。  
彼は、とってもまじめで働き者よ。でも……最近、問題を抱えているようだね。遅刻が増えている、心配だわ。



**イマニー**：エドックがベンスを探してるの？ でも、残念ながら、ここにもまだ来てないわ。  
ムントウイ豆が詰まった樽を、30個も運び出さなきゃならないのに…… 力持ちのベンスがいないと、終わりそうもないわ。

**エリモン**：……ベンスのやつ、またいなくなっちゃったのか？ 最近、記憶が曖昧になることが多いしくて、妖異に取り憑かれているかもと、本人も悩んでいたんだ。  
仕事熱心なヤツだから、ここに向かうとしているかもしれないな。ここクォーリーミルの道中で、見渡してみてくださいよ。

**????**：うう……いたた。こ、ここは……。

**エドックの兄**：はい、私がベンスですが…… 私のニックネームをご存知なんですね…… もしや私は、貴方とどこかでお会いしたんでしょうか？  
……なるほど、妹から頼まれてきてくれたんですか。ありがとうございます、ご迷惑をおかけしました。  
貴方のことを忘れたわけじゃなくて、安心しました。  
でも、また全身が身に覚えのない傷だらけになっていて、ここにたどり着くまでの記憶もありません……。  
ああ、精霊様…… どうか、わが身から妖異を取り払ってください。

**????**：おまえに妖異なんて憑いてねえよ！

**バスカロン**：そいつは、ただの悪酔いだ！ ……珍しく酒代を払い忘れるほど酔ってたから、心配になって、後を追いかけてきてみやコレかよ。

**エドックの兄**：バスカロンさん！？ 私が悪酔いだなんて……そんなはずありません！ 私はお酒に弱くて、ほとんど飲めないんですよ？

**バスカロン**：……ああ確かに、おまえは酒に弱い。酒場に漂う香りだけで、酔っちゃうほどにな。  
だが、ひとたび酔っちゃうまえば最後、自ら酒をくらって、周りの客に絡んでは毎度ポコポコにされてんだろうが！  
……まさか酔ってて、全部覚えてなかったのか！？  
酒房「バスカロンドラザーズ」の悪名高き「**酔客のスペンサー**」とは、ベンス……お前のことだ！！



**スペンサー**：な、な、な、なんてことだ！？ じゃあ私は、酔っ払って、全てを忘れてただけですか！？  
……知らなかった！ 酔っていたとはいえ、大変なご迷惑をおかけしました！！ いくら謝罪しても、謝罪しきれません！！  
と、とりあえず本日のお代を受け取ってください。後日、改めて謝罪に伺います。  
それでは、私は仕事場に急ぎますので…… これにて失礼します！！  
はっ、そういえばブレイヤ様との面談が…… ですが、もうその必要はありませんね。  
恥ずかしいので、貴方からブレイヤ様にお伝えください……。

バスカロン : ペンスのヤツ……まさかケンカのことまで忘れてたとはな。幻術士様に、悪酔いしない方法を教わったほうが良さそうだ。

ブレイヤ : ……悪酔いが記憶喪失の原因だったのですか！？ なんとも人騒がせなことがあったものです……。  
とはいえ、妖異がらみでなくて一安心ですね。  
ですが……謝罪のためとはいえ、スベンサーが酒場へ赴けば、また酔ってケンカを始めてしまうかもしれませんね。  
今後も、スベンサーが酒場で暴れているのを見かけたら、彼のためにも、力尽くで止めてやってください。

## 美男の伝統舞踊

先輩レターモーグリ : 今回は、豪勢な気分が味わえる仕事クボ。コスタ・デル・ソルの大富豪…… 「ゲゲルジュ」さんへの配達クボ！  
送り主は、有名な舞踏家ギョーノ先生クボ！ コスタ・デル・ソルには、踊り子さんがいっぱいクボ。  
手紙は踊りについての話クボ？  
コスタ・デル・ソルに配達へ行ったときは、ついでに踊りをのぞくのがモグの楽しみクボ……  
クボクボ……今のはゲゲルジュさんにはヒミツなのでクボ！

ゲゲルジュ : 遅いのう、まだかのう。舞踏家からの返事は、まだかのう……って、あなたはああ！  
きよ、きよ、今日はどんな用件で参られたんじゃ？  
これは待ち焦がれた舞踏家からの返事！ まさか、あなたが配達してくれるとは驚きじゃ〜。  
ここは再会を祝して、特別に教えちゃうのじゃ！  
実は、期待の新人踊り子ちゃんを発掘してのう。この逸材に、ワシの理想の踊りの稽古をつけてもらうため、  
舞踏家のギョーノ先生に、依頼をしていたんじゃが……。  
この手紙には、「顔だけの踊り子には指導できない」と書かれているのじゃ……。う〜ぬ……ザンネンじゃのう。  
しかし、ありがたいことに、ワシが望む「心が高まるような大人の踊り」を指導できる  
舞踏家の先生について、書かれているようじゃ！  
どうやら、この「心高める踊り手」は、外地ラノシアのアイアンレイクにいるらしい！  
この踊り手に、ワシとの契約書を届けてくれんかのう？



心高める踊り手 : 嗚呼、遙か、なりブロンズレイク……。今一度、あの湯、に浸かりた、い……。  
我に、契約書、が届いたと……？ ふむ……果たして、いかなる契約、か……？  
お、お……おお、お……高まってき、た！！ こんな日、が必ず来る、と信じてい、た！！  
我らマムージャ族、の伝統を解する者、が現れる日、を！！  
……ひとり高ぶってしま、い申し訳ない。マムージャ族の伝統の舞、を指導するとい、う  
ゲゲルジュ様の依頼……ありがたき、ことこの上なし。  
報酬も実、に魅力的……！ だが問題は報酬で、はない！ 喜ばしいの、は我らの伝統、が理解されたこ、と！  
我らマムージャ族、は なによ、り伝統、を重んじる民族な、り！  
我ら、はエオルゼア、に武を売りに来、た！ これ伝統文化、を糧とする我ら、の生き方！  
そして踊り、もマムージャ族、が誇る伝統な、り！

ブガージャ : ゆえに、この**ブガージャ**、喜び勇み、て伝統の踊り、を指導すると誓お、う！  
ゲゲルジュ様、の恩義に報いるため、に！  
今すぐ、偉大なる主のもとへ参じたいところだ、が その前に伝統に則り、なすべき儀式、がある。  
お主にも儀式、を手伝ってもらいたい。  
本来ならば、ブロンズレイクにて行すべき儀式だ、が…… かの温泉地、の衛兵、伝統の「湯浴みの踊り」を侮辱し、  
私の入浴、を禁じる始末！  
別の地に、て儀式を行う、ことやむなし。ここより西の「隠者の庵」に、参られ、よ。

ブガージャ : 良くぞ来てく、れた。ここは隠者、が住まう庵な、り。  
しかし庵の主、は留守なること、多く…… 小さいながら湯、を使うことができ、る！  
我らマムージャ族、にとって、あまり、に狭い湯船なのは無念だ、が…… この際は贅沢、を言ってはい、られない！  
さあ、この祭器、に満たした湯、を 三度わが身、にかけてくれ。身体を清、めるのだ！

ブガージャ : ……うむ！ その調子、で もっと激し、く湯をあびせる、がいい！

ブガージャ : ……ま、だだ！ もっともっと激し、く！ 美男のブガージャ、の心を高め、るのだ！ 最後に念入り、に湯をあびせ、よ！

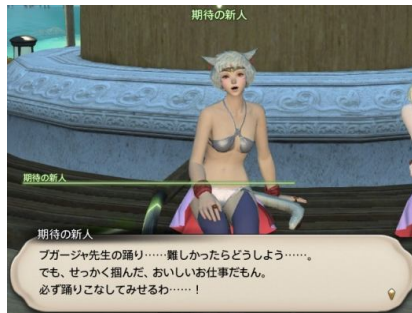
ブガージャ : お、おおお、おおお！！ 美しき鱗、が湯に濡れそぼ、り、男ぶり、がいやがおうに、も増してゆく！  
我が心身、は清め高ま、り最高の状態！ ブロンズレイクでない湯、でも儀式を終えられたの、は  
貴公、の献身的、働きのおかげ、よ！！  
さあ、準備、は整った！ 早速、我、新しき主、ゲゲルジュ様に目通りに赴く。  
貴公もゲゲルジュ様に報告、を忘れるなよ、さらば！

ゲゲルジュ : 契約書を届けてくれて、助かったんじゃよ〜。おかげで、素晴らしい舞踏家と出会えた。  
さっそく先生に、新人ちゃんの稽古をつけてもららんじゃ〜。  
心高まる「大人の踊り」……実に楽しみじゃのう〜。稽古の内容次第では、あなたへの謝礼もはずむのじゃ〜。  
どうせなら、稽古も見ていくといいんじゃよ〜。稽古場は「隠れ滝」じゃから、そこで待っててほしいのじゃ〜。

ブガージャ : ……お主か、また会えると、は光栄。その節、は大変世話になった。偉大なる主と引き合わせてくれ、たこと感謝している。  
……主ゲゲルジュ様のご到着次第、我らの伝統の踊り、を披露することになっている。  
それに向けて精神、を統一しているところ、だ……。

期待の新人 : ブガージャ先生の踊り……難しかったらどうしよう……。でも、せっかく掴んだ、おいしいお仕事だもん。  
必ず踊りこなしてみせるわ……！

期待の新人 : 傭兵で有名なマムージャ族が先生なんて！ きっと……キレッキレの踊りに違いないわ。  
どうしよう……楽しみ過ぎて心が高まっちゃう！



ブガージャ : 我が主ゲゲルジュ様…… 我らマムージャ族の伝統の踊りに価値、を認め 世に広める機会、を与えたもうた事、を感謝いた、す。  
マムージャ族、がもっとも、心高まるの、は湯浴みな、り！ ゆえに心高まる踊り、を所望する主、に伝え  
「湯浴みの踊り」、を披露いた、す。

ゲゲルジュ : さあさあ、新人ちゃん。ブガージャ先生の心高まる「大人の踊り」を、一瞬たりとも見逃さず、覚えるんじゃぞ〜！

新人の踊り子たち : は、はいっ！ どんなにキレッキレの難しい振り付けも、私たち、ゲゲルジュ様のために、踊りこなしてみせます！



ブガージャ : いざ……参る！  
ウーッ、ヤッ、ハッ！ 我 は死す！ 我 は死す！  
ウーッ、ナッ、ハッ！ 我 は生きる！ 我 は生きる！  
ウーッ、ヤッ、ハッ、ウーッ、ナッ、ハッ！  
湯 に浸かりて 我 は死す！ 湯 より出でて 我 は生きる！  
ウーパッパッ、ウーパッパッ！ フィッ、デッ、ラッ！  
生まれ変わ りし男を見 よ！ 太陽の元 へ昇れ 昇れ！

新人の踊り子たち : キヤアアアアアーーーー！！

ゲゲルジュ : んほほほほほほ！ よいよい～これぞ「大人の踊り」じゃよ～！  
……むむ、皆の者、どうしたんじゃ～？



ブガージャ : 我が主ゲゲルジュ様…… いったい皆、どうされたの、か……？

ゲゲルジュ : ふむ～、ウブな新人ちゃんには、先生の「大人の踊り」は、ちと早すぎたようじゃのう～。  
わが護衛ですら、のぼせて倒れてしまったようじゃ……。  
ここはひとまず帰るしかないのう……。先生と冒険者殿には、お礼を用意してあるんじゃ。  
ワシのところに寄ってほしいんじゃよ。

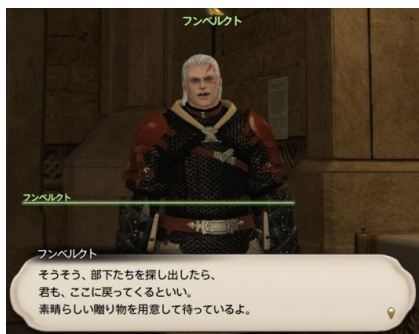
ゲゲルジュ氏の私兵 : 心配はご無用です、あまりの刺激に鼻血が……。ゲゲルジュ様は、おひとりで戻られました。  
私も、動悸が鎮まれば、すぐに戻ります……。

ゲゲルジュ : ふう～、先生の「湯浴みの踊り」…… 想像以上に卑猥で、最高じゃったのう～。  
芸術が理解されないのは、悲しいことじゃのう～。  
侍従長の話では、新人ちゃんは、泣きながら辞表を出して、逃げてしまったそうじゃ……。  
せっかくの逸材だったのに、ザンネンじゃのう～。  
踊り子がいなくなってしまったから、ブガージャ先生との契約も、これにておしまいじゃ。  
先生には、キャンプ・ブロンズレイクの温泉を、一日貸し切る権利でガマンしてもらうことになった。  
ザンネンじゃのう～。……ああ、新人ちゃんの「大人の踊り」…… 想像しただけで、高まってきちゃうののう～。

## 追いたい背中

先輩レターモークリ : 今回は、美しい仕事クボ！ 銅刃団オーキッド連隊所属の大隊長さん、その名も「フンベルクト」さんに小包のお届けクボ！  
フンベルクトさんは、ザナランの交通と物流の要所にして激戦区、「ハイブリッジ」を守る防衛部隊の隊長さんクボ！  
隊長さんの美しい背中、ハイブリッジの名物クボ。そんな隊長さんの背中に憧れた兵隊さんがいっぱいなのが、  
ハイブリッジの防衛部隊なのクボ！  
モグがハイブリッジに寄ったときには、フンベルクトさんは非番でお留守だったクボ！  
裁縫師ギルドでお買い物中らしいから急いで届けるクボ！

フンベルクト : これもちがう……あれもちがう……。むう……理想の美しい布など、容易く見つからないものだな。  
ああ、手配した布は、いつ届くのだろうか……。  
……おお、これを待っていたのだ、ありがとう。これは、黒衣森のシルフ族が織るきめ細やかなシルクだ。  
なめらかな手触りと、独特の光沢が素晴らしいのだよ。  
オレは普段、ハイブリッジで警備にあたっているんだが…… そこで襲われていた荷馬車が、この布を積んでいてね。  
一目で気に入り、すぐさま注文したってわけさ。  
この美しい布で、オレの美しい背中をいっそう美しく引き立てる外套を仕立てれば、休暇を取ったかいがあるってものだ。  
早速、デザインの打ち合わせを…… おや、わが部下が、都市の賑わいに浮かれて飛び出したきり、まだ戻っていないようだ……。  
ついでも悪いが、我が部下を探して、呼び戻してくれないか？ 名は「エ・タージャ」と「エ・ラームイ」。  
ふたりとも、ウルダハ都市内にはいるはずだ。  
外套のデザインを決めるには、部下の助言が不可欠なものでね。  
そうそう、部下たちを探し出したら、君も、ここに戻ってくるといい。素晴らしい贈り物を用意して待っているよ。



エ・タージャ： ニャ、ニャ、ニャ、どれも綺麗で迷っちゃうニャ。美しい隊長にお似合いのアクセサリー。どれがいいかニャ……？  
ニャ！ びっくりしたニャ、隊長が呼びニャ？ 急がニャきや、でも決められニゃいニャ！  
そうだ冒険者さん、相談のってほしいニャ！ フンベルクト隊長の美しさを引き立てるのは、  
どっちのアクセサリーかニャ？

ルビーのイヤリング

……やっぱりニヤ。私も、そう思ってたのニヤ。隊長の鎧も戦化粧も、ぜんぶ赤だもんニヤ！

ルビーの赤は、ラームイの瞳の色と同じだから、迷ってたのニャ。でも、冒険者さんが言うなら、こっちにするニャ！

## サファイアの指輪

エ・タージャ：銅刀団には、隊長の美しさを理解できない人がいるニャ。だから、この贈り物で隊長の美しさを引き立てて、団員に納得させてやるのニャ！  
……昔、私とラーメイは攫われたことがあったニャ。そのとき助けてくれたのが、フンベルクト隊長ニャ！  
すごく怖かったのに、隊長の美しさに勇気づけられたニャ！  
このとき、私は美しい隊長に一生ついていくって決めたニャ！　きっと隊長は、こんな昔話なんて覚えてないだろうけどニャ。  
じゃ、私は行くニャ！

エ・ラームイ： ニヤ、ニヤ、ニヤ、迷っちゃうニヤ。強い隊長が、もっと活躍しちゃうお業。どれがいいかニヤ……。  
ニヤ！ びっくりしたニヤ、隊長が呼びニヤ？ 急がニヤきや、でも決められニヤいニヤ！  
そうだ、冒険者さん、意見を聞かせてほしいニヤ！ 強いフンベルクト隊長がもっと強くなるのは、  
どっちのお業だと思うかニヤ？

赤い小瓶の剛力の靈藥

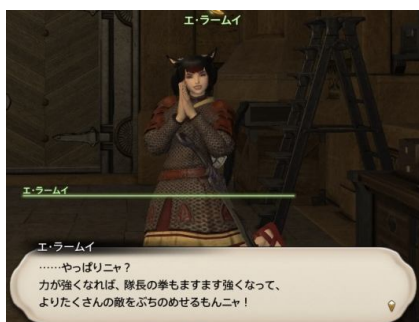
……やっぱりニャ？ 力が強くなれば、隊長の拳もますます強くなって、よりたくさんの敵をぶちのめせるもんニャ！

それに、なんといっても小瓶の色が素敵だニャ！ 赤は隊長の好きな色だし、私の瞳の色とも同じだしニャ！

蒼い小瓶の活力の靈藥

銅刃団には、隊長を弱いという人がいるのニャ。隊長が傷だらけなのは、先頭に立って戦ってるからニャのに！

エ・ラームイ： だから、私の贈り物で隊長にもっと活躍してほしいのニヤ。  
……幼い頃、私とタージヤは攫われたことがあるのニヤ。でも、フンベルクト隊長が犯人をぶっ倒して、  
私たちに自由と希望をくれたのニヤ！  
だから、私は強い隊長の側で戦い続けるって決めたのニヤ！ きっと、隊長は昔の私たちなんて覚えてないだろうけどニヤ。  
じゃ、私は行くニヤ！



**エ・タージャ**：隊長の武器は美しさニヤ！ 隊長は、もっと美しさを伸ばすべきニヤ！ だから隊長は、私の贈り物を受け取るのニヤ！

エ・ラームイ：隊長は、ありのままでも十分美しいのニャ！ それより、もっと強くなって、もっと活躍すべきニャ！  
だから隊長は、私の贈り物を受け取るのニャ！

フンベルクトの部下たち：ニヤニヤニヤニヤー————！！！！

エ・ラームイ： 隊長、隊長！ 私の贈り物を受け取ってほしいのニャ！ 隊長が、より強くなること請け合いなのニャ！

エ・タージャ： 隊長、隊長！ 私の贈り物を受け取ってほしいのニャ！ 隊長が、より美しくなること請け合いなのニャ！  
隊長の服は、ヒラヒラすると素敵ニャ！ 私の贈り物と一緒につけると、隊長はもっと美しくなるニャ！

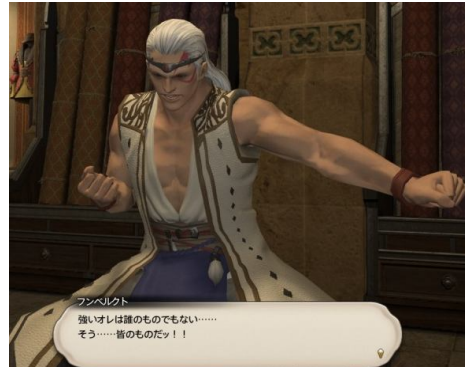
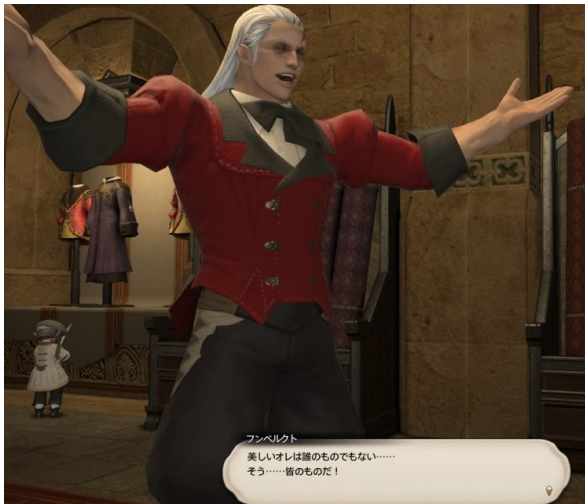
エ・ラームイ： 違うニャ！ ピカピカさせて、目立った方がいいニャ！ さらに私の贈り物を使えば、もっと活躍できるニャ！

フンベルクト : ごらごら、ふたりとも喧嘩はよくなさい。強くて美しいオレを見て、落ち着くがいい。  
……だいたい君たちは、大きな勘違いをしている！  
アクセサリーや薬などなくても、オレは、十分に……強く美しい！  
ない知恵をしばって選んでくれたであろう贈り物は、自分のために活用しなさい。  
オレは、君たちの気持ちだけで胸がいっぱいだ！  
……さて、冒険者も戻ってきたことだし、君たちに、オレからとおきの贈り物をあげよう！  
美しいオレは誰のものでもない…… そう……皆のものだ！

エ・タージャ : ニヤニヤニヤニヤー！ 今回、お買い上げた服の試着会ニヤ！ 隊長サイコーニヤー！！

フンベルクト : さあ、よく見るがいい…… 君たちの眼に……脳裏に、オレの美しさを刻みつけるのだ！  
強いオレは誰のものでもない…… そう……皆のものだッ！！

エ・ラームイ : ニヤニヤニヤニヤー！ 隊長サイコーニヤー！！ 試着会が見れるなんて、冒険者さんは幸せ者ニヤ！



フンベルクト : ごらごら、君たち……少しは落ち着きなさい。オレの美しさに、我を忘れるのもいたしかたないが……  
さっきから当たり前のことしか言っていないぞ？  
ザナランの天で輝くお天道様と並ぶオレの美しさ…… まばゆさに目がくらもうが、直視し続けるがいい！

フンベルクトの部下たち : ニヤニヤニヤニヤー！ 隊長サイコーニヤー！！ 隊長の部下でよかったニヤー……！！



フンベルクト : うむ、仲直りできたようだな。君たち姉妹は、仲よくしているのが一番だ。  
さあ、楽しかった休暇も、そろそろ終わりだ。ハイブリッジが、オレたちの帰りを待っているぞ……  
出発の準備を整えなさい。

フンベルクトの部下たち : 了解ニヤー！ やっぱ隊長は、戦ってる時が一番素敵ニヤ！

フンベルクト : ……部下たちが世話をかけたね。彼女たちが世間知らずなところがあるのには、少しばかり理由があるのだ。  
幼いころ……親に売られ、まともな教育を受けていないのだ。オレの部隊が、彼女たちを仲買人から救出したのだが、  
その後は、物乞いをして生き抜いてきたようだ。  
貧しい暮らしで、悪へ染まる方が楽だったはずなのに、あの子たちは、それを踏みとどまり、オレの背中を追い求めて、  
人々を守る衛士になってくれた……。  
だからオレは、あの娘たちに…… 「美しい背中」を見せ続けねばならんのだ。  
彼女たちの生き方を変えてしまった責任があるからな。  
君も人生に迷ったときは、美しい背中を探すがいい。助けを求める声ある限り、オレはハイブリッジに屯している。  
ともに悪と戦い続けようではないか！